Matsumoto Dental University
Graduate School of Oral Medicine

1780 Gobara, Hirooka, Shiojiri,
Nagano 399-0781, Japan

第 125 回松本歯科大学大学院セミナー

日　時：2006 年 10 月 6 日(金)　16 時 30 分~17 時 30 分

場　所：実習館 2 階総合歯科医学研究所セミナールーム

演　者：Prof. Gilles Lavigne, DMD, PhD, FRCD (Oral Medicine)
(Sleep and Biological Rhythm Research Center, Sacre-Coeur Hospital Faculty of Dental Medicine, Universite de Montreal)

タイトル：Association between sleep bruxism and headaches?
睡眠時ブラキシズムと頭痛の関連はあるのか？

睡眠時ブラキシズム（Sleep bruxism; SB）は歯ぎしりや噛みしめを特徴とする睡眠時運動異常症である。質問表を用いた研究から、SB は一般集団の 8%で自覚しており、緊張性頭痛患者の 14%、顎関節症患者の 5-9%で自覚している。また 60%程度の SB 患者は頭痛を訴え、頭痛のリスクは口腔顔面痛患者では 3.1 倍になるという報告がある。

SB 発生の背景には、約 8 分前から交感神経活動の上昇、4 秒前から脳波活動の上昇、1 秒前から心拍数と開口筋の活動の上昇、閉口筋活動の上昇および歯ぎしりの発生、といった一連の連鎖過程が認められている。そこで、SB 患者に clonidine (alpha adrenergic agonist)を投与すると睡眠中の交感神経活動の減少し、SB が約 60%減少した（Huynh et al., Sleep）。一方、100 名の SB 患者で睡眠検査を行い解析したところ、軽度、中等度、高度の 3 群が存在することがわかった。また、軽度 SB 患者は、中等度･重度の SB 患者の 2 倍の頻度で起床時の頭痛は訴えるが、健常者では全く頭痛を訴えない。そして、SB 患者が頭痛を訴える Odds ratio は 4.5 であった。さらに、閉塞性睡眠時無呼吸症候群の治療に用いられる下顎前方移動装置を SB 患者に使用すると SB の著名な減少が認められたことから(Landry et al., 2006)、睡眠中の呼吸と SB の関連について予備的な分析を行ったところ 9 名の SB 患者中 4 名で、睡眠中の呼吸機能に何らかの異常が認められた。

これらの結果は、臨床的に報告されていた SB 患者が訴える慢性的な疼痛、頭痛と SB の因果関係を生理学的に研究する必要性を示唆しており、その要因の一つとして睡眠中の呼吸の状態も考慮する必要があると考えられる。

担当：顎口腔機能制御学講座　森 本 俊 文